

「底が突き抜けた」時代の歩き方 578

どこにも届かない手紙を書いた日本の兵士たち—映画『硫黄島からの手紙』

クリント・イーストウッド監督は、太平洋戦争で日米最大の激戦地となった硫黄島を舞台にした映画『父親たちの星条旗』で、“英雄”をつくりだすアメリカの戦争神話に押し隠された本当の悲惨な姿を暴いてみせた。硫黄島の山頂に米軍の兵士たちが星条旗を掲げる有名な報道写真に映しだされた6人の兵士のうち、生き残った三人が英雄にまつりあげられて、政治家やメディアに利用され、戦争継続のための戦時国債販売の片棒を担がされた挙句に、苛酷に見捨てられていく。英雄になどなりたくなかった三人の若者からすれば、本当の英雄は写真になど映らないところで島に埋められているのに、自分たちはイベントで模造の山上に旗を立てるパフォーマンスを要求されたり、戦場とは別世界の派手なパーティにかり出されるという鬱屈をかかえこんでいた。

三人のうち一人はまともな生活を送ることができたが、あとの二人は生活の歯車が狂って、かつての英雄とは信じられない悲惨な貧困生活のなかで壊れていく。この物語はフィクションではなく、実話であったが、イーストウッド監督は膨大な死者を生み出す戦争が生き残った者の人生に及ぼす残酷さを見据えることで、人間は戦争に耐えて生きられるような存在ではありえないことを描いてみせたのだ。黒田邦雄は『キネマ旬報』（06年11月上旬号）で、この映画のもう一つの視点を次のように指摘している。

《ここでイーストウッドは、硫黄島での勝利が物量作戦にものを言わせた結果でしかなく、精神性においては貧弱そのものであったと断定している。周囲の海を埋め尽くす軍艦と、空を覆う戦闘機、そして7万を超える兵士たち。アメリカ軍はこんな小さな島は一週間で制圧できると踏んでいたから、物量で片付けてしまおうと思ったのだろう。上陸して5日目に早くも勝利宣言の星条旗を摺鉢山すりばちに立てるなどという茶番をやっているのだが、そのあと日本軍に一ヶ月近くも粘られ、7000人もの自軍兵士を死なせてしまった。（中略）

つまり、あの写真は、アメリカの勝利のシンボルではなく、アメリカの軽薄無恥のシンボルだったのだ。しかし、アメリカはこの写真をどこまでも勝利のシンボルにかかげ、生き残った三人の兵士を国民的ヒーローに仕立てる。》

上陸した5日目に勝利宣言の星条旗を山頂に立てるという光景は、もちろんイラクに侵攻したアメリカ軍がバグダッドに入った直後に、勝利宣言としてフセインの銅像を引き倒した光景に重なっている。イーストウッドが硫黄島における日米戦争を取り上げたとき、何回も勝利宣言を発しながら内乱状態に陥りつつあるイラクの混迷を視野に入れていたことは、明白である。アメリカ国民の中にそそり立つ、硫黄島に星条旗を立てて

いる兵士たちの銅像神話を解体することで、アメリカは戦後60年を経過しても、その体質は全く変わっていないことを浮き彫りにしてみせたのだ。《何もかも物量にものを言わせて良しとするアメリカの体質を批判するがごとく、イーストウッドはこれでもかと物量大作戦のナンセンスを映像で見せつける》が、そんなアメリカの物量主義に対抗して、物量の乏しい日本は精神主義を向かわせると言う。

《日本側の描き方は神妙である。日本兵は殆ど姿を見せないが、五分と言っているほどの存在感を演出している。"やつらはどこにいるんだ"と途惑うアメリカ兵に向けられる、掩蔽壕からの銃口。狙いを定めるべくゆっくりと動く銃のシルエットが、アメリカ軍とは違う静的な戦いを感じさせる。》アメリカ兵の前に姿を見せない日本兵という構図が、アメリカの物量主義では捉えられない日本の精神主義を明示していることはいうまでもない。イーストウッドは当初『父親たちの星条旗』のみを映画化する予定であったが、リサーチを重ねた後に、アメリカ軍の敵であった日本軍の栗林忠道中將に興味を持ち、二作目の『硫黄島からの手紙』を手がけたと語っており、このことはアメリカの物量主義によく対抗しえた日本の精神主義を捉えないかぎり、『父親たちの星条旗』は片手落ちになることに彼が気づいたことを意味していた。

映画パンフに収録されている「PRODUCTION NOTES」の中で、イーストウッドはもう少し具体的に栗林中將に興味を引かれた理由について語っている。《『父親たちの星条旗』の製作準備をしていたとき、彼は第二次世界大戦の太平洋戦線が繰り広げられた時期と場所についての調査に没頭した。「調査を進めるにつれ、栗林中將が硫黄島防衛のために採ったユニークな防衛戦術に非常に興味を惹かれた」とイーストウッドは説明する。「米国海軍と海軍航空隊からのあれほどの集中爆撃に日本軍がなぜ耐えることができたのか、米軍は知らなかったんだ」。戦力で圧倒的に勝る米軍を撃退するのはほとんど不可能だと思われたなかで、栗林はこの島の黒い、火山性の土地そのものから防衛戦術を編み出した。約30キロに及ぶトンネル、5000もの洞穴、そしてトーチカを蜂の巣のように結ぶことによって、遙かに数の少ない日本軍がそこから米軍を狙うことができるようにしたのだ。彼は兵士たちに、死ぬ前に敵を10人殺せと命じた。アメリカに対して強い親近感を抱いていた栗林は、アメリカとの戦争に反対だったのだが、それでも情熱と信念をもって戦った。「この島を猛烈な、そして非常に明確な方法で防衛しようとしたこの男は、いったいどんな人物だったのだろうか」と私は考えた」とイーストウッド。「彼は島中をトンネルで結び、すべてを地下に装備させたんだが、それは当時の日本軍の防衛戦術とはかなり異なるものだった。日本軍の防衛線のほとんどは海岸の上陸拠点に展開され、海へと大量の砲火を浴びせるものだったからだ。だが、この戦いではその戦術は効果的ではなかった。彼の戦術に対しては、彼自身の部隊の中でも反発が大きく、島中にトンネルを掘るなんてバカげていると思った将校たちも多かった」

そんな戦術を採った人物についてさらによく知るため、イーストウッドは数多くの日

本語の文献を翻訳させようとした。そんななかで、彼は栗林中将自身による書簡集——『玉碎総指揮官』の絵手紙（栗林忠道著／吉田津由子編／小学館文庫刊）——に出会った。「その手紙は彼の妻、娘、そして息子に書かれたものだった」とイーストウッドは説明する。「その多くは、1920年代後半から30年代前半にかけて武官として駐在したアメリカから出されたものだ。彼はとても繊細で家庭的な男だったので、祖国の家族がとても恋しかった。それらの手紙から、彼がどんな人物だったのかが感じ取れたよ」

日系アメリカ人二世の脚本家アイリス・ヤマシタも、その本を研究して、栗林の人柄に同じように感銘を受けた。「クリントは彼の手紙から映画のインスピレーションを得た。そのときに彼が感じたのとおそらく同じ印象を、私も受けたの」と彼女は言う。「この心の優しい、愛すべき父親が硫黄島で日本軍を指揮したなんて、とても信じられなかった。彼の手紙にはイタズラ書きやマンガやユーモラスな愛情が詰まっていたわ。彼が息子を可愛がり、会いたがっていたことがよく伝わってくる手紙なの」》

姿を見せずに掩蔽壕から銃口を突きだして自分たちを狙い撃ちにする日本兵は、アメリカ兵からすれば彼らの理解を超える存在だった。アメリカ兵と闘っている敵の日本兵がどうにも理解しがたかったのは、アメリカ人であるイーストウッドにとっても同様だった。彼が撮ろうとした『父親たちの星条旗』は、英雄にまつりあげられた三人の若い兵士が戦場ではなく、砲弾の飛び交わない本国で自滅していく悲惨な姿を描いたが、イーストウッドが敵の総指揮官である栗林中将に興味を持って調べるなかで、その人物像が明瞭な輪郭を際立たせて浮かび上がってきたとき、彼はアメリカ兵と敵として向かい合った若い日本兵たちにも視線を向けざるをえなくなり、アメリカ兵を描くなら、姿を見せぬ場所から銃撃してくる日本兵も描かなければ、この映画は完成しないと思ったにちがいがなかった。

同じ「NOTES」の冒頭で、日本兵が「どんな人間だったかを知することは、日本だけでなく、世界中の人々にとって重要だと思う」と述べ、「この2本の映画は勝ち負けを描いたものではなく、あの戦争が人間にどんな影響を与えたか、そして戦争がなければもっと長く生きられたであろう人々のことを描いている」とイーストウッドが語ったとき、アメリカ側と日本側を同じ目線で描けたときに硫黄島を舞台にした戦争映画は完成すると言っていたのだ。しかし、同じ目線で描くなら、アメリカ兵の気持は同じアメリカ人として理解できるイーストウッドは、自分たちとは異なる文脈にある日本兵の論理と心情の理解しがたさの闇の中に踏み込む必要があった。そのことに関して、「NOTES」には続けてこう記されている。

《また、栗林が率いた若い兵士たちについて調べるにつれ、その顔と声が同じように蘇ってきた。「硫黄島に連れて来られた若い兵士たちはアメリカ兵と実によく似ていた」とイーストウッドは言う。「彼らは戦場にいたいわけではなかった。彼らは生きて戻れると思うなと言われて島へ送り込まれたんだ。これはアメリカ人に本気では言えない。ほとんどのアメリカ人は、『きっと危険だろうし、命を落とすかもしれないが、帰って

来られるかもしれないし、普通の生活に戻れるかもしれない』と考えながら戦場に行くからね」。だが若い日本兵たちにとっては違った。「あのとき、彼らは島に残る可能性が高かった」とイーストウッドは続ける。「それは私としては理解するのがとても難しいメンタリティーだが、私はそれをなんとか理解するために、彼らについて、そして彼らにとって戦争とは何だったのかについて、できる限りの資料を読んだんだ」

同じようにヤマシタも、日本の防衛軍について調べていくなかで、45年にあの島に運命を置かれた兵士たちをリアルに感じとることができた。彼女はこう思い返す。「まるで彼らがそれぞれのストーリーを語り始めたかのように、その生き様がありありと浮かんだの」》

『ミリオンダラー・ベイビー』(04)の脚本家で、『父親たちの星条旗』脚本を共同執筆したポール・ハギスは、《この2部作に対するイーストウッドの情熱について、こう語る。『硫黄島』2部作について話すとき、クリントの顔はいつも輝いていた。彼はリサーチが大好きなんだ。歴史についていろいろな発見をすることがとても好きなんだよ。歴史の細かい点や、今回は特に日本側の視点について、知られていなかった事実を発見することにとっても熱を入れていた。戦闘が始まる前に硫黄島で起こっていた事柄や、戦闘の特異性やそんな中でも楽しい出来事などについてだ」》

アメリカ兵が生きて帰るために戦ったのに対して、日本兵は死ぬために戦った。イーストウッドはそんな日本兵の心理がわからなかったので、それを理解するためにももう一つの映画を撮らなければならなかったのだ。生きて帰れない絶望的な戦争にアメリカ国家は兵士を送ろうとはしなかったし、兵士のほうもそんな戦争には赴こうとはしなかった。「国のために死ぬ戦争」を遂行していた日本国家にとって兵士とは、自分の任務を遂行するために命を投げだすことのできる者でなくてはならなかった。だいいち、硫黄島の戦闘では兵士が生きて帰れる余地は皆無であった。生きて帰れなくても戦わなくてはならなかったし、生きて帰れないからこそ戦わなくてはならなかったのだ。栗林総指揮官は生きて帰れないのに戦わなくてはならない絶望と虚しさが希望に結びついてることを説いて、兵士たちを過酷な戦闘に向かわせたのである。では、彼が指し示した希望とは何であったのか。

アメリカ側の圧倒的な戦力をもってすれば5日間で終了するとみられた硫黄島戦が36日間にも及ぶ長期戦になってしまったのは、パンフ所収の戦史研究家白石光によれば、栗林中将がこれまでの日本軍が採用していた水際壊滅作戦を変更して、別の作戦に転換したのが原因であった。水際殲滅作戦とは、《上陸したばかりでまだ体勢が整っておらず脆弱な状態にあるアメリカ軍を、海岸線から動き出す前に殲滅するという作戦で、特に太平洋の島嶼部のように、土地が狭く奥行きのある防衛戦を構築できない条件下では、敵の上陸を阻止するのに適した方法といえた。しかしこの作戦には弱点もあり、上陸する側の兵力が圧倒的に強力な場合、水際で戦うべく配備された守る側の兵力が、戦う前に逆に叩き潰されてしまう恐れがあった。

実際、それまでの島嶼部の戦いにおいて、日本軍はことごとく水際殲滅作戦でアメリカ軍を迎え討ったものの、強大なアメリカ軍の前に、ひとつとして防衛に成功した戦いはなかった。だが、それ以外に適当な作戦がなかったというのもまた現実であった。ところが硫黄島の防衛に際しては、別の作戦がとられることになる。持久作戦がそれだ。》

栗林中将が同じ玉砕であっても、持久作戦を採用したのは、硫黄島がアメリカ軍によって占領されると、日本本土への攻撃が一気に加速されることを見越していたからだ。白石は、島国である日本が戦争に勝つための最重要課題は《海洋を制すること》であり、《日本海軍よりも優勢なアメリカ海軍をいかにしてやっつけるかという点に主眼を置き》た戦略構想を編み出した、と言う。それは、《西海岸を出発し太平洋を日本に向けて攻めてくるアメリカの大艦隊を、日本本土からはるか遠くの洋上にあるうちに、洋航型潜水艦（伊号潜水艦）や長距離航空機（海軍陸上攻撃機）を用いて暫時邀撃し、日本近海に到達するまでにその数をできるだけ減らしておき、それから艦隊同士の決戦を挑んで雌雄を決しようという戦略構想であ》り、《日本海軍の数的な劣勢を補う》ための止むに止まれぬ戦略構想だった。

硫黄島を含む小笠原諸島が、この戦略構想を実施していく上で、《重要な前進拠点に位置付けられていた》のは、《洋航型潜水艦も長距離航空機も連合艦隊も、ここを中継地点として、決戦場に想定されていた中部太平洋へと出撃できるからであ》り、《特に硫黄島は、絶海の孤島ではあったが、その地形が飛行場を造るのに適していたため最重視されていた。》硫黄島を含む小笠原諸島が日本にとって、《重要な前進拠点》であったということは、当然ながらそこをアメリカ軍に占領されることが日本にとってどれほどの脅威となるか、を意味した。《しかし、1941年12月に太平洋戦争が始まると、緒戦を連戦連勝で飾った日本は、小笠原諸島よりもずっと東の太平洋の島々を占領して最前線としたため、硫黄島を含む小笠原諸島が日本は後方（二線または三線）と位置付けられ、こと防衛に関しては、掛け声ほどには力が入れられていなかった。》

いうまでもなく連戦連勝によって《小笠原諸島よりもずっと東の太平洋の島々を占領して》いくことは、日本からますます遠ざかり、逆にアメリカに近づいていくことであったから、戦闘人員や武器の確保、戦闘機等の給油体制などを考えれば、連戦連勝は日本を他方で苦境に追い込む要因になってくることは充分予測された。つまり、緒戦の連戦連勝は連戦連敗への呼び水といってもよかった。

《ところが、大敗北に終わった1942年6月のミッドウェー海戦を転機として日本は敗退の途へと追い込まれ、44年に入ってマーシャル諸島、さらには、日本本土を防衛するための絶対国防圏の要衝とされていたマリアナ諸島までアメリカ軍に占領されるに至り、硫黄島を含む小笠原諸島の重要性が一気に高まった。なにしろ、日本から中部太平洋へと進出する際の重要な足掛りになるということは、逆に、アメリカにとっても中部太平洋側から日本を攻略するうえで同じ価値を持つことになるからである。

この頃、アメリカは先に占領したマリアナ諸島に超長距離重爆撃機B29の基地を設

営し、日本本土に対する爆撃を開始していたが、日本軍は、飛行場が整っていた硫黄島から戦闘機を発進させれば、B 2 9 の往復路を襲うことが可能だった。同時に、硫黄島はB 2 9 の接近を早期に日本本土に通報する前哨としても機能していた。

こんな硫黄島がもしアメリカ軍によって占領されれば、日本は単に前哨を失うのみならず、マリアナ諸島からでは遠すぎてB 2 9 に同行できなかったアメリカ軍の戦闘機が、硫黄島を基地として、B 2 9 を護衛するようになるであろうと予想された。

そこで日本軍は、中部太平洋の島嶼部を統轄する第31軍隷下で小笠原諸島方面の防衛に任ずる小笠原地区集団の増強を図ったが、戦況の進捗（実際には恒常的な敗退）に鑑みて同集団を同軍の隷下から除外し、新たに小笠原兵団として独立させた。特に硫黄島は、前述したように飛行場を造成するのに適した地形であったため重点的に防衛されることになり、同兵団の主力である第109師団が配備された。同師団長は小笠原兵団長を兼任したが、その人物こそが栗林忠道中将であった。》

彼の採った持久作戦こそ、死を覚悟して戦う日本の兵士たちに対して、意味のある戦いを提出した希望の目標にほかならなかった。自分たちの命を懸けた戦いがけっして無駄死にではなく、日本本土に住む家族と直結していることを明示する持久作戦であったのだ。《強力なアメリカ軍に対して水際殲滅作戦を挑んでも、結局のところ、逆にこちら（日本軍）が殲滅されてしまうというこれまでの戦訓に加えて、硫黄島から日本本土までの距離を勘案すると、できるだけ同島の戦いにアメリカ軍を釘付けにして時間を稼ぎ、その間に日本本土の防備を強化するとともに、可能な限り大きな損害を与えることになり、日本本土での戦いともなれば、その損害がどれほどのものになるのかという懸念をアメリカに抱かせようとしたのだ。》

制空権を米軍に掌握されるなか、約6万人のアメリカ軍に対してわずか2万1千人あまりの日本軍が持久作戦で挑むためには、絶望の中で希望を紡ぎだす以外になかった。しかしながら、持久作戦は生きながらの地獄の様相を呈することになった。《それまでの戦訓から、アメリカ軍に目を付けられた島嶼は海路も空路も遮断されてしまうため、日本軍は、増援部隊や補給物資を送ることも、防衛している部隊を撤退させてやることもできず、玉砕するのを指を咥えて見ているだけだったが、その玉砕、つまり自殺的な全面突撃を敢行する時期だけは、現地部隊の判断に委ねられていた。ところが持久作戦の場合は、玉砕することなく最後のひとりに至るまで戦い続けなければならないのだ。

このように、いったんアメリカ軍の上陸が始まれば、生還の望みのまったくない硫黄島守備隊だったが、戦前、アメリカやカナダで勤務した経験を持つ国際派で、統率力にも優れた知将・栗林中将の下、一丸となって防衛陣地の構築に尽力した。というのも、持久作戦を長く戦うためには、それに適した堅固な防衛陣地を多数構築し、そこに籠^{こも}って戦うのが最善の策であったからだ。

こうして、島内には交通地下壕で結ばれた多数の地下陣地が造られたが、元来が火山

性の島なので地熱が高く、硫黄を含んだ温泉水からの蒸気や亜硫酸ガスが随所に噴出するなかでの陣地建設作業は苦難の連続であった。そのうえ、硫黄島には飲用に適した地下水や河川水がないため、飲料水は雨水に頼るしかなく、守備隊員たちは水不足に苦しんだ。指揮官として、こういった事情をすべて理解していた栗林中将は、将校と下士官・兵を差別せず公平に食糧や水を分配することにより、圧倒的多数を占める下士官・兵の士気を高め、全将兵の気持ちをひとつにまとめたのだった。》

その成果が、《硫黄島守備隊の勇戦ぶり》にあらわれた。《南部の防衛拠点であった摺鉢山要塞陣地群は、栗林中将が予測していた10日間ではなく、その半分の5日間で陥落し、脱出に成功して北の中部台地陣地群に合流できた日本軍将兵もごくわずか》という劣勢をしいられながら、《1945年2月19日のアメリカ軍上陸以降、弾薬、医薬品、食糧、水などがまったく補給されないじり貧状態にあるばかりでなく、救援も撤退も望めない状況下、以降、実に36日間にわたって戦い続け、アメリカ軍に多大な出血を強いた》のである。

政治学者の小室直樹は「硫黄島と栗林中将の真実」(『WiLL』07. 2)で、《ガダルカナルで敗れ、日本軍の敗色濃厚だった昭和19年6月》、父島に到着した栗林中将が師団司令部を父島から硫黄島に移して、《わざわざ前線に赴いて、「予は常に諸子の先頭に在り」と自ら部下と困苦をともにしながら指揮》を取った姿を書きとめている。《将校ハ兵ノ食事ニ万福ノ注意ヲ払フヲ要ス 将校ノ分ノミ別ニ炊事シテ兵ノ給食カ如何ナル状態ニ在リヤニ無関心ナルカ如キト断シテアラサルヲ要ス／上官巡視ノ場合部隊カ工事等ヲ中止シ敬礼スル要ナシ (以下略) 》

「師団長注意事項」の全将兵に対する通達の中のこの項目について、こう説明する。《将校も兵隊と同じものを食べ兵士の栄養状態に気を配ること、そして(地下壕の)工事中は上官が見回りに来ても敬礼する必要はないと言うのだ。これは軍隊にあってまったく異例の通達である。栗林中将は自ら率先してこれを実行、兵隊の士気をあげて効率的に戦闘準備を進めた。

全員が命令に忠実に動いたのは、同じ物を食べ、同じように苦しみ、いつも先頭に立っていた師団長への心からの信頼によるものだった。その意味でも栗林中将の統率力は素晴らしいものであった。

さらに、栗林中将は一人一人の兵隊と接していたため、全兵が彼の顔を知っていた。アメリカ軍が捕虜に「栗林はどんな顔をしているのか」と聞いたところ全員が答えられ、これには米兵も驚いたという証言がある。》

硫黄島の戦闘でアメリカ軍が摺鉢山の陣地占拠を最初めざしたのは、摺鉢山から全島に駐屯する日本軍の動きを手取るように見渡すことができたからである。圧倒的に不利な地上戦をできるだけ長く遂行するためには、《海岸に陣地を置かず、地下陣地を掘ってそこから地上の米軍を撃つ、という作戦》以外にありえないことを栗林中将は見抜いていたのだ。だが、飲料水不足は深刻で、一人当たり一日半リットルしか支給され

ない水は、《飲めば必ず下痢をする》不衛生な雨水であり、《パラチフス、下痢、栄養失調患者が続出》するなかでの、ツルハシと手による穴掘りに兵士たちは従事したのである。

《栗林中将は地下足袋に杖をついてこれらの工事を視察し、杖であちこちを計測したり細かな指示を与えたりした。そればかりでなく兵隊ひとりひとりに親しく声をかけてねぎらい、ときには恩賜の煙草を与えたりもした。》

栗林自身、一日にアルミのコップ一杯の水で洗面と手洗いをし、飲み水も食べ物も一兵卒とまったく同じだった。とれたての新鮮な野菜と真水を入れた四斗樽が大本営から届けられたときには、部下たちを呼んで皆で分け合ったという。

戦前の日本の軍隊は大変な階級社会で、師団長も一兵卒も同じ待遇というのは考えられないことだったが、栗林中将は最後までそれを実践したのであった。》

共に生き、共に死ぬ運命共同体にあっては、上官も一兵卒も同じであることを栗林中将は覚っていたのである。彼が一人一人の兵隊にやさしく接したのは、彼らを自分の分身とみなしていたからだ。他方で彼は師団長としての自分の心構えを「敢闘ノ誓」として全軍に配布し、一丸となるために浸透を図った。

《一 我等ハ全力ヲ奮ッテ本島ヲ守リ抜カン

一 我等ハ爆薬ヲ擁キテ敵ノ戦車ニブツカリ、之ヲ粉碎セン

一 我等ハ挺身敵中ニ斬込ミ敵ヲ鏖殺セン

一 我等ハ一発必中ノ射撃ニ依ッテ敵ヲ撃チ斃サン

一 我等ハ各自敵ヲ十人殪サザレバ死ストモ死セズ

一 我等ハ最後ノ一人トナルモ「ゲリラ」ニ依ッテ敵ヲ悩マサン》

抜刀して「バンザイ突撃」で集中攻撃を浴びる従来の日本軍の無駄死にを戒め、有名な「一人十殺」を謳ったこの「敢闘ノ誓」は兵隊たちによく守られた、と小室は言う。死に直面した過酷な持久作戦の中で「あくまで戦い続けよ」と鼓舞しつづけるこの紙片を前に、《兵隊たちはこの心得を手帳に書き付け、つねに暗誦して肝に銘じた。そして部隊が全滅し師団長が戦死したあとも、生き残った兵隊は地下で戦い続けたのである。

栗林中将の教えが守られたのは、いかに栗林中将の人望厚かったか、ということでもある。アメリカ海兵隊員は、この「敢闘ノ誓」が記された紙片を、海岸沿いの塹壕で、洞窟で、トンネルで、トーチカで、そして日本兵の屍骸の上で、硫黄島のあらゆるところで発見した。》

もっとわかりやすく、記された「膽兵の戦闘心得」も配布され、兵士たちが具体的勝つ実践的な行動が取れるように導いた。

《戦闘準備

一 十倍の敵打ちのめす堅陣とせよ 一刻惜んで空襲中も戦闘中も

二 八方より襲ふも撃てる砦とせよ 火網に隙間を作らずに戦友斃れても

三 陣地には糧と水を蓄えよ 烈しき砲爆、補給は絶える それも覚悟で準備を急

げ

防禦戦闘

- 一 猛射で米鬼を滅すぞ 腕を磨けよ一発必中近づけて
- 二 (略)
- 三 一人死すとも陣地に穴があく 身守る工事と地物を生せ 偽装遮蔽にぬかりなく
- 四 爆薬で敵の戦車を打ち壊せ 敵数人を戦車と共に これぞ殊勲の最なるぞ
- 五 轟々と戦車が来ても驚くな 速射や戦車で打ちまくれ
- 六 陣内に敵が入っても驚くな 陣地死守して打ち殺せ
- 七 (略)
- 八 長斃れても一人で陣地を守り抜け 任務第一 勲をたてよ
- 九 喰はず飲まずで敵撃滅ぞ 頑張れ武夫 休めず眠れぬとも
- 十 (略)
- 十一 一人でも多く斃せば遂に勝つ 名誉の戦死は十人斃して死ぬるのだ
- 十二 負傷しても頑張り戦へ虜となるな 最後は敵と刺し違へ 》

日本軍の硫黄島での死闘がアメリカ軍に与えた打撃は非常に大きく、その犠牲の甚大さがアメリカ軍の内地上陸を断念させ、原爆投下、ソ連の対日戦への引き込み、ポツダム宣言へとつながったというのが、小室の推測である。硫黄島の戦闘で日本軍が示したあまりもの勇敢さが、物量作戦で一気に押し潰そうとしたアメリカの日本に対する蔑視を見直させ、戦後日本の繁栄に結びつくことになったから、《栗林中将以下、硫黄島の兵士たちの功績というのはべらぼうに大き》く、《コップ一杯の水も、硫黄島兵士の困苦を偲んで有難く飲まなければいけない》と、締め括る。

司令官として「戦闘ノ誓」や「膽兵の戦闘心得」などを作成して、全軍に配布する栗林中将の細やかさに、家族あてに数多くの手紙を書き綴った彼の筆まめさが感じ取れるが、東大助教授の加藤陽子は『週刊現代』（07. 1. 20）への寄稿文のなかで、多くの人々の心を揺さぶる彼の手紙に注目する。たとえば、次女・たか子（当時9歳）に宛て硫黄島から出された、<たこちゃん、元気ですか？ お父さんが出発の時、お母さんと二人で御門に立って見送ってくれた姿がはっきり見える気がします>との文面で始まる手紙などから、彼が激しい戦闘が押し迫ってくるなかでも、家族に対する愛情を片時も忘れなかった彼のやさしさと凄みを見て取ろうとする。家族に対するやさしさと部下に対するやさしさとは、おそらく通じ合っていた。彼は軍隊のなかでも部下に対して父親として振る舞おうとしていたのだ。父親であれば部下（子）に心遣いを示すのは道理であった。

加藤は当時の軍人が遺した資料群との異質さを栗林の資料群に感じて、こう指摘する。《たとえば、昭和7（1932）年8月30日付で、カナダから兄・芳馬に送った手紙がある。前年8月、栗林は初代カナダ公使館付武官として赴任していたので、何か重要

な情報が書かれていないものかと読んでみると、それは母の死を悼む手紙だった。一部を引いておく。

＜母は昔のものの事とて、之れと云ふ教育は無けれど、非常に賢明で且気丈者で、私としては幼時より其感化を受けたことは一通りでないと思つてゐます。それに小生が何時も他郷に暮してゐるせいか、何時迄も小児に対する愛情を以て小生にのぞみ、小生も何時になつても、小児の慈母に対する情を以て母にのぞんで来たものですが、それが遂に臨終に会し得なかつたのですから何と云ふても心残りがして仕方ありません＞

もちろん、同時期に起きていた満州事変についての言及もある。文末に＜満州事変は大體順調に進んで居れど、國際的には日清日露役以上の大難局のことにて、小生等も一刻も心を許されない情況です＞とあるが、あくまで淡々としたものだ。この感じは、すでにさまざまな本に紹介されている、昭和19（1944）年6月25日の、硫黄島から妻・義井と子供たちに宛てた手紙の、次のような一節から受ける印象と符合する。

＜夫として父として御身達に之れから段々幸福を与え得るだらうと思つた矢先き此の大戦争＞

この表現に、私は、家庭人として戦争を語ることのできる職業軍人の沈着をみた思いがした。日中戦争以来の年月を入れればすでに7年の年月が経過している昭和19年の時点で、こう言える者は、あまりいなかったのではなかったか。＞

一旦、戦地に赴いたからには親子の情愛を断ち、めめしく家族に後ろ髪を引かれずに、後顧の憂いなく全力をもって戦うべし、というのが、戦時中の軍人としての心構えであつた、と我々は聞かされてきた。戦場に来てまで家族のことをいつまでも思い煩っているような奴が、勇敢な兵士であつたためしがない、というように思い込まれている風潮があつた。だが、それは「弱さ」のあらわれであつた。戦闘のことしか眼中にないように振る舞おうとするのは、戦闘以外のことを考えたら戦闘に専念できなくなると思つていたからだ。それほど弱いということの表明以外のなにものでもなかつた。家族のことをたえず考えているから、どんな苛酷な戦闘にも耐えることができる、というのが栗林の信念であつた。自分も含めて戦場の兵士たちは日本のためでもなければ、天皇のためでもなく、自分の愛する家族のために、最も愛する者のために戦うのであり、そうであつてこそ戦う力が最大に發揮される、と彼は信じていたのである。

加藤は《軍中央の硬直した「弱さ」》に《対して、栗林は柔軟な心をもつていたから、あるいは神に近くなどなかつたから、妻と子供に＜幸福を与え得るだらうと思つた矢先き＞の大戦争に、ああ仕方がないと一つため息をつき、あとはやるべきことを淡々とやれたのだらう》と述べ、《作家・吉田健一がどこかで言つていた、「柔軟な心、優しい心があつて初めて、本当に無慈悲になれる」という洞察。アメリカを知り、柔軟な心があり、優しい心をもつていた》からこそ、《アメリカを最も苦しめることができたということだらう》と言う。そして、《夫であり、父であるふつうの家庭人が、職業として軍人を選び、戦場で戦つていた、ということのをわれわれは心に刻んでおく必要があるのではないか》と結ぶ。

いうまでもなく戦争の残酷さは、《夫であり、父であるふつうの家庭人》である一人一人を、戦場で勇敢に戦わせることのできる兵士に変えてしまうところにあるだろう。妻と子供のことを考えながら戦うのではなく、妻と子供のことを考えるなら戦わないということもありえただろう。選択肢があったなら、妻と子供にまで累が及んでいく戦争に加担しないという術もあっただろうが、全国民が戦争に巻き込まれてしまい、ましてや職業軍人であった栗林にどうのこうのという選択肢などありうる筈がなかった。追込まれた状況でいかに最善を尽くすか、尽くすことができるか、が指揮官としての彼が考えるすべてであった。他の将校たちが敗色濃厚な戦況のなかで、戦うことよりも潔く死ぬという美学を成就することに心情を傾けていったのに対して、栗林はそんな美学を退けて粘り強く戦うことで敵を苦しめ、妻と子供が暮らす日本本土の有効な防波堤になることへと邁進していったのである。

映画『硫黄島からの手紙』の冒頭が61年後に数百通もの手紙が硫黄島の地中から掘り起こされるシーンから始まったのは、妻へ、母へ、子供たちへ書かれた兵士たちの手紙が届けられないまま、地中に埋められていったことが、この島での日本軍の戦闘のすべてを物語っていると設定されていたからだ。手紙は届くことを前提として書かれるものであるけれども、硫黄島の兵士たちは届かないことを前提とした手紙を書いたのである。激戦中で手紙が届かないことがわかっていても、彼らは手紙を書かざるをえなかったのである。それは、なぜか。手紙を書くことで家族と遠く離れた硫黄島にいる自分とがつながっていることを、自分自身に確認したかったからだと思う。届かない手紙を書く想いが、苛酷な持久作戦を耐えさせる原動力になっているにちがいがなかった。つまり、持久作戦が耐えがたい戦いであればあるほど、兵士たちは届かないかもしれない、いや、届かないであろう手紙を書くことで自分たちを癒やしていたような気もする。

今は届かない手紙が自分の死後、いつか家族には届くということを兵士たちは確信していたのだろうか。その確信の下に、地中に埋められていったのだろうか。地中に埋められているかぎりには、誰かの手でいつかは掘り返されて、手紙は家族のもとに届けられていく筈だ、というわずかな可能性に賭けていたのだろうか。というより、どんな絶望状態であろうとも、手紙を書くことに希望を見出したかったのだろうか。さまざまな問いが頭を駆けめぐるが、唯一明白なことは、彼らは届かないことがわかっていても、手紙を書き、地中に埋めたということである。家族への手紙を書きつづけていた栗林中将が、兵士たちにむかって家族宛に手紙を書くことを勧めたことがきっかけであったとしても、届かない手紙を書きつづけた彼らは自分たちがけっして家族と切断されていないことを確信しながら、自分の死後も希望を紡ぎつづけたのだと思う。激戦の最中に一瞬であれ、手紙を書きつづける希望をもてたことは、彼らにとって至福であったにちがいない。届かないという絶望の中で、それでも手紙を書きつづけた彼らは、戦争によって届かない現実自分たちの生存の事実がけっして断ち切られることはない、という永続的な抵抗を示していたように感じられる。

2007年1月28日記